

教授
詫摩佳代

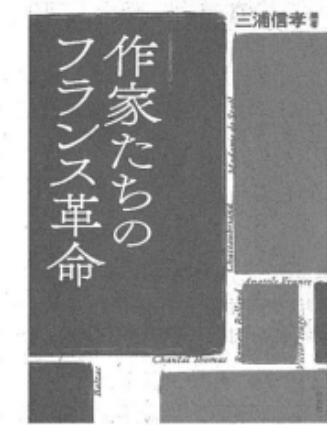
のアウトプレーンの誕生を告げる出来事だった。このフランス革命に関しては無数の書物が著されてきたし、文學も例外ではない。本書は、19世紀から現代までのフランス作家が、革命をどのように表象してきたかを問う論集である。

見渡せば、政治理展し、また進歩にむけた壁は失われつづけない。そ

こ、各々の個人のレベルで適切な判断を下すことがある。人間は読まれる

作家たちのフランス革命

三浦信孝編著



(白水社・2750円)

みうら・のぶたか 45年生まれ。中央大学名誉教授。著書に『現代フランスを読む』など。本書は三浦氏を含む7人による

共同執筆。

〔評〕 仏文學者

小倉孝誠

クやユゴーは、革命とナポレオンをめぐって紡ぎ出されたさまざま

る。その伝説や神話を相対化するように、彼らもまたジャコバン派やナポレオンを登場させる作品を書いた。ドレフュス事件の余燐がくすぶる中で書かれたアナトール・フランスの『神々は渴く』(1912年)は、恐怖政治下で過激地は小さくなかった。王党派の貴族シャトーブリアンは、見事な回想録『墓の彼方からの回想』(1849~50年)の中で、革命が大きな歴史の動きの一過程だとしてその意義を認めつつ、革命期の民衆の暴力には肩をひそめた。

革命後の時代に育ったバルザックやデミックは、革命とナポレオンをめぐって紡ぎ出されたさまざま

な伝説や神話を生きた世代である。その義がときには獨裁へと変貌する現象は、現在の世界でも見られる現象だ。すぐれた歴史小説は、つねに現代の状況と共振するのである。

日本と異なり、フランスの歴史小説は実在した人物を登場させつゝも、背景に退かせることが多い。たとえば現代作家シャンタル・ト

マの『王妃に別れをつけ』(2002年)は、バスティーユ牢獄で王妃と宫廷生活の実像を描く。架空の人物のまなざしが、歴史の真実に肉迫するための技法として有効に機能しているのだ。

無いものねだりを承知で言えば、革命期を背景にした一連の小説を発表したデュマについての章が欲しかった。とはいって、世代やイデオロギーの違いを超えて、フランスの作家にとって革命が永遠の主題たりつることを本書はよく示している。そして、論じられた作品を読者が手に取りなくなるような配慮にも満ちている。

「永遠の主題」へ古今の視点

日経%

%